
浮世絵ファミリア

nao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮世絵ファミリア

【Nコード】

N7673Z

【作者名】

nao

【あらすじ】

僕こと浮世絵静馬しずまは高校二年生になったばかり。

父不在、母死別。

完璧すぎる兄さんとの二人暮らしだったはずなんだけど。

「妹欲しくないか？」

いきなり音信普通だったはずの父からの電話で生活が一変。

いきなり五人の妹が？

どこぞの十二人のお兄さんよりはマシだけど。

これから、どうするよ？

「じゃあ、兄ちゃん明日には帰るから、留守番頼んだぞ」

「うん」

「そうそう、土産は食べ物と、雑貨どっちがいい？」

「うん、食べ物で」

「わかった。お前がなんか、これどうすればいい？　みたいな事態になったら、連絡入れるよ」

そう口にして、我が兄、浮世うきよ絵籠馬えりょうまは、仕事へと出かけていった。僕自身、しっかり者であり、非常に計算高く、トラブルさえも力技で何とかしてしまう。そんな、ヒーローレベルの力を持っている兄が、未だに僕を心配してくれることが嬉しくもあり、悲しくもある。兄さん、だって、僕はもう十六ですよ？

そんなわけで、独りになった我が家で何をしようかと、若干悩んでしまう。家は、代々続く刺青の彫り師の家系で、兄さんはその十五代目。父はちゃんぽらん人な人で、兄さんが十五のときに、家業を強引に継がせると、

「じゃあ、旅に行ってくるから」

って、世迷いごとを口にして家を出て行ってしまった。

それ以降、一年に一度家に帰ってくるかどうか。母は、僕が生まれて二年ぐらいで病死。そのため、この家には現在僕一人。普段は、兄さんがいるので、寂しいと感じたことはあまりない。なんていえばいいのかわからないけど、兄さんが僕の父親代わりであり、兄であり、母でもある。って言った具合のスペシャルぶりを発揮しているから。

「さて、ゲームでもするかな」

本日の家事も終了させて、仕事にでた兄さんは、まさに素晴らしいの一言に尽きる。料理、洗濯、掃除。家事を完璧にこなすことができ、おまけに仕事もきつちりこなす。まさに、パーフェクト。比べられると悲しくもなるけど、自慢の兄。どうして、こんな超がつく有料物件の兄さんが結婚しないのか、そこが今の僕にとって最上級のなぞ。

そして、ゲーム機の電源を入れた僕は、電話がなっていることに気づき、出る事に。ちなみに、このゲーム機、先週発売されたばかりで、現在品薄状態。でも、兄さんが、

「んだよつ、欲しいなら進学祝に買ってやるよ」

つとくちにして、なぜか買ってきてくれた。本当に、どうやって手に入れたのか、なぞだけど。おつといけない、電話がまだ鳴ってる。

「はいもしもし、浮世絵です」

「おおつ、その声は、静馬まじだな？」

あれっ？ この声はまさか、父さん？

「黙ってられると、父さん困っちゃうぞ？ むしろ金銭的な意味で」

「なら、国際電話なんてかけてこないでよ」

「くそつ、どうしてうちの息子たちは、こう、冷たいんだ。人肌が恋しくなってくるじゃないか」

「自分の行いを振り返ってみると良いよ」

「くうつ、天国の母さん、息子が冷たい。こうなったら温まる為に、デリヘルのおねえちゃんよんで、あつたまって良いかな？」

「そうだね、後ろから刺されるといいよ」

本当に疲れるな、この人の相手してると。突っ込めば良いのか、ボケれば良いのかわからないし。おまけに何の為に電話かけてきたのか、ちっともわからない。

「そうそう、ところで龍馬は？」

「兄さんなら仕事で出かけてる。行き先は聞いてないけど、明日には帰ってくるって言ってた」

「そうか、なら、好都合だな」

何、悪いこと考えてるんだ、この人。

「実はな、」

「あんまり思わせぶりなことを口にしたら切るよ？」

「うつつ、段々静馬も母さんや龍馬に似てきて、父さん、寂しい」

五十過ぎの人が何を言っているんだか。それにしても、兄さん、母さんに似てたんだ。僕はあんまり覚えてないけど、きっと、この人と結婚したくらいだから、ものすごく器の大きい人だったんだな、多分。

「お前、妹欲しくないか？」

「何、お酒は控えたほうが良いよ？ 酔っ払いの言葉は信用できないから」

「うつつ、父さんめげないぞ」

頼むからそこはめげて欲しい。っというよりも、いきなり妹ってどういうこと？ まさか、ついに犯罪に手を染めたのか、この人。

「実は、父さん、愛人いたんだ」

「過去形だね」

「三人ほど」

へえ。これ、兄さんに報告したら、それだけで血の雨が降りそうだな。それにしても、三人？ この人に付き合える奇特な人が、母さん以外に三人もいたことが不思議でならない。世界七不思議に挙げて良いくらいに。

「それでな、みんな亡くなってしまったんだ」
「ご愁傷様」

うん、この人には悪いが、僕には関係ない。慰謝料云々の話なら、きっと兄さんがどうにかするだろうし。

「それで、話が戻るが、妹欲しくないか？」
「それって、愛人の子どもってこと？」
「おおっ、話が早いな」

今までの会話の流れで、理解できないほうがおかしい。それにしても、この年で妹ができるのか、何歳ぐらいだろう？

「実はな、もう、そっちの住所の地図渡して、向かってもらってるんだ」

「へえ、それで？」
「おう、五人ほど行くから、後よろしく」
「ちょっと待て、ロクデナシ」

口調が変わってしまったのは、ご愛嬌。五人？ それって、誤認にかけた冗談じゃないよね。ってことはだ。

「五人って、どこの戦隊ヒーローだよ。つゝか、そんな話電話で力

ミングアウトせずに、直接帰って話せよ」

「だって、父さん、龍馬怖いし」

コノヤロウ。兄さんじゃなくても、一片マジでシメテヤリタイ。

「そんじゃ」

「おい、ちょっと待て、話は終わってないぞ」

いきなり電話を切られた僕は、本当にどうしようかと悩んでしま
う。いや、いきなり妹ができるってことはびっくりだよ。でも、弟
か妹は欲しかったのは確かで。でもでも、頼めるような家庭環境じ
やなかったし。いや、でも、五人って多すぎだろ？ ああ、ここは
兄さんに一度連絡を取ってみるべきか？ でも、運転中だったら迷
惑だろうし。

そんな時、インターホンが鳴った。

うん、コレって、どう考えても、さっき聞かされた妹様たちだよ
ね。出前は頼んでないし、新聞の集金もまだのはず。宗教勧誘だっ
たら、この際、この状況を愚痴っても良いかな。はあ、しょうがな
い。ここはアレだ。居留守ってことで。

そう考えたら即座に行動。兄さんからソフトも一緒に買ってもら
ったRPGとシュミレーション。どっちで遊ぶかなあ。なんだかん
だ言って、兄さん付き合ってくれるから、シュミレーションのほう
でレベル上げしておこうかなあ。

ってあれ？ なんだろ、玄関から何かが割れる音が聞こえました
よ？ これって、空き巣って奴ですか？ 警察呼んだほうがいいで
すか？

とりあえず、急いで玄関に向かうと、そこには、五人の少女がキヤリーバッグ片手に立っていました。おいおい、これって、不法侵入で訴えたら勝てるだろ。

「あつ、玄関閉まってたみたいなんで、不躰ながら、上がらせていただきます」

玄関のドアをぶっ壊してね。

「えっと、父さんから話を聞いていると思います」
うん、ついさっき聞いたばかりで、心の整理もできてないよ。

「このたび妹になりました？ 愛莉あいりです」
疑問符は要らないと思う。とりあえず、自己紹介してくれた、ポニーテールの女の子は、愛莉というらしい。

「愛莉の双子の妹、小鳥ことりだよ」
ショートカットの女の子がぶつきらぼうに挨拶してくれる。とりあえず、君はお姉さんから、愛嬌というものを少し分けてもらうといい。

「えっと、渚なぎさって言います」
何でか金属バットを持っている少女。うん、間違いなく、この子が玄関のドアを破壊しましたね。

「沙紀さきです」
消え入りそうな声で自己紹介する少女。メガネに三つ編みとは、なんてマニアックな。

「花火はなびだよっ」
元気いっぱいに自己紹介してくれるちびっ子。そうだね、君がー

番、妹といわれてしっくり来るよ、精神的な意味でも、外見のな意味でも。

「「「「「これからよろしくお願いします」「」「」

五人同時に、打ち合わせしていたように頭を下げてくる。

神様、クーリングオフって可能ですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7673z/>

浮世絵ファミリア

2011年12月25日01時51分発行